

# アジア・アフリカ言語文化研究所 2025 年度 外部評価報告書

アジア・アフリカ言語文化研究所外部評価委員会

永崎 研宣（委員長）

青山 弘之

梅崎 昌裕

帯谷 知可

堀 博文

本委員会は、文部科学省が 2023 年度に実施した共同利用・共同研究拠点中間評価の対象とならなかった活動や事業を含め、アジア・アフリカ言語文化研究所（AA 研）の活動全体を評価し、中長期的な未来に向けて研究所活動のさらなる改善に資することを目的に組織され、同研究所から提出された資料及び質疑応答（2025 年 10 月 24 日に実施）に基づき、共同利用・共同研究拠点第三期が始まった 2022 年度から 2024 年度末までの研究所の活動を 8 つの観点で評価した。以下はその報告である。

なお、本報告書の作成にあたっては、原則として外部評価委員会による評価を「（1）評価の詳細」、今後に向けての提言を「（2）提言」としてまとめた。

## 観点 1：研究所の掲げる 3 つの使命を達成するための研究活動が実施されているか

外部評価委員会は、全員一致で、研究所の掲げる 3 つの使命、すなわち①臨地研究（フィールドサイエンス）に基づく共同研究の推進、②研究資源の収集・分析・編纂および研究成果の発信、③共同研究や研修・セミナー等を通じた次世代研究者の養成を達成するための研究活動が十分に実施されていると評価した。

### （1）評価の詳細

3 つの使命を達成するための具体的な研究活動について個別に評価すると、まず①共同研究の推進のために、1) 共同研究の実施（一般型・外国人客員共同研究型・短期滞在型に大別され、公募）、2) フィールドサイエンスの構築（フィールドサイエンスの方法論などについて議論・情報交換する場の設定）、3) デジタルアーカイブの構築（フィールドで得たデータや資料のアーカイブ化、研究成果としてのデータベース構築）、4) 研究成果の刊行の 4 点が有機的に連携して共同研究を支えられるようデザインされており、独自性が高いと評価できる。特に、共同研究の中で資料のデジタル化やデータベース化に対する体系的な支援が受けられることは、共同研究参加者にとっては大きなメリットと言えよう。学際的な研究の推進についても意識をもって取り組んでいることがうかがえる。

②については、アジア・アフリカの多様な言語文化資料のデジタル化と公開 IRC プロジェクト（共同研究、毎年募集）を通じて推進し、1 年あたり 10~20 件程度のプロジェクトの成果が蓄積され、それらをオンラインリソースポータルで公開するところまで支援を行う情報資源利用研究センター（IRC）の役割がとりわけ重要である。オンラインリソースポータルは地域や種類によって分類されており、とても使いやすい

仕様になっている。特に、元所員による調査資料の保存と公開は、その地域の研究に資するだけでなく、今後のデータの保存や公開のあり方、更にはフィールドワークの手法そのものの研究や記録にも繋がるという点で、とても重要な試みであると思われる。

また所内の研究組織を見直し、TUF<sub>S</sub> フィールドサイエンスコモンズ (TUFiSCo) を設置し、実施体制を整えている点は今後も成果発信が期待される。

定期刊行物として、『アジア・アフリカ言語文化研究』、『アジア・アフリカの言語と言語学』、『NUSA: Linguistic studies of languages in and around Indonesia』を刊行しているが、いずれも査読付きであり、編集委員には所外の研究者や海外の研究者も関わっていることから、国際的に高い水準の刊行物と言える。

いずれの分野においても共同利用・共同研究による成果が出され、十分な発信がなされていると言える。特にそれらが国内のみならず、国外の出版社からも出されている点は高く評価できる。同様に、国際学術誌における一定数の論文の掲載は特筆に値する。また、令和5年度に7件、令和6年度に5件の受賞は、いくつかの研究成果が学会などで高く評価されていることを示している。

研究成果を企画展として公開していることは、社会貢献の一環として考えられる。

③について、言語研修、中東・イスラーム関連セミナー、文化／社会人類学セミナー、フィールド言語学ワークショップ、フィールドネット・ラウンジ等が、研究者コミュニティの中で安定した評価を得て、すでにしっかりと定着し、若手研究者の養成の機会となっているほか、研究者間の情報共有の場ともなっている。これらが、言語学、歴史学・地域研究、人類学のそれぞれの分野において活発に行なわれている点が評価に値するだろう。

## (2) 提言

使命の②に関しては、これまでに蓄積してきたデジタル研究資源を活用しつつさらに蓄積していくことについて、何か方策があれば、デジタル時代・AI時代におけるAA研のより大きな飛躍につながるのではないかと。

一般向けの広い読者層を対象とした『FIELDPLUS』（フィールドプラス）が29号（2023年1月）をもって休刊となったのは残念であった。

研究の成果を教育の場に活かすことは、今後とも継続して行なっていただきたいと思う。一方で、研究者として育て上げていくというのは、博士論文の指導だけをみてもそれなりの時間を要し、また、指導者としての責任も伴うものである。それが所員の過重な負担になっているのではないかとという危惧もある。

## 観点 2：「国際的な共同利用・共同研究拠点」にふさわしい共同利用・共同研究が実施されているか

外部評価委員会は全員一致で、「国際的な共同利用・共同研究拠点」にふさわしい研究活動が十分に展開されていると評価し、共同利用面における本研究所の活動についても、十分であると評価した。

### (1) 評価の詳細

2つの海外研究拠点（バイルート中東研究日本センターJaCMES、コタキナバル・リエンゾンオフィス KKLO）が設置されていることは特筆に値する。両拠点をベースとする共同利用・共同研究課題をはじめ外国人を含む共同研究課題、バイルート拠点における若手研究者報告会、外国人客員研究員制度などを踏まえると、日本人研究者の海外派遣、外国人研究者の招聘の双方向で、国際的な研究活動が十分に実施され、優秀な研究者が国際的に集結する場となっていると判断できる。

また共同利用・共同研究課題が、アジア・アフリカのほぼ全地域を網羅するように多くの課題を実施している点も評価できよう。

### (2) 提言

国際的な共同利用・共同研究をさらに展開していくにあたり、今後の課題として外国人スタッフやゲストへの対応、業務連絡、イベントのオーガナイズなどにおいて英語あるいは多言語対応が可能なサポートスタッフを配置するなど、研究環境の国際化をはかることが期待される。

多くのプロジェクトを実施しているにも拘わらず、それを支える事務職員の数が少ないのが気になるところである。その分、所員や個々の事務職員の負担が大きくなっていることが懸念される。これも人件費の問題があるとは思いますが、所員の負担を軽減するだけでなく、また、所内のインフラの維持・管理のために職員（特に技術職員）を増やすことをご検討いただきたい。

海外拠点については、開催するイベントに加えて、日常の業務を通じて達成されている成果が可視化されれば、拠点を通じた貴研究所の研究活動の意義が明示し得るように思われる。

学際研究という観点に関しては、文理融合の拠点となることが期待される。

デジタル研究資源を通じた発信や協働については、NII や NII のオープンサイエンス基盤研究センターなどの機関との連携の可能性を模索してもよいのではないかと。

**観点 3：科研費を含む外部資金（グラント）による共同研究に関して、具体的にどのような成果があり、またどのような展開が今後望まれるか。**

外部評価委員会は全員一致で、共同研究の成果は十分であるとの評価であった。

(1) 評価の詳細

学術変革領域研究（A）あるいは基盤研究（S）のように、どの機関の誰が採択したかをそれぞれの分野の研究者が認識する大型研究費を取得していることは、AA 研のアカデミックプレゼンスを示すことに有効に機能してきたと思う。

その他の一般的な研究費の取得・採択率も十分と言える。採択率は、3割台後半から4割台前半の間にあり、高い採択率を維持していると言える。

所員による研究成果が様々な賞を受賞している点は、学会などにおいて高く評価されていることを示している。

研究成果として編纂・出版された書籍の多さにより成果が十分に達成されていることが確認できた。書籍刊行に加え、デジタル・オープンアクセスにも取り組んでいる

(2) 提言

今後も、大型／一般研究費の取得が継続することを願っている。また、これまでの文理融合的な要素を含み、アジア・アフリカを横断的にとらえる方向性を発展させつつ、フラッグシップとなる新たなプロジェクトの構想が期待される。現行の JSPS 学術知共創プログラム「身体性を通じた社会的分断の超克と多様性の実現」は、そのような位置づけとなる潜在的可能性を有しているだろう。

共同研究の構成員がプロジェクトの枠組みのなかで公刊している査読付論文を成果として明示することで、達成度をより可視化し得ると感じた。和書のみならず英語（あるいは、対象地域で広く使われている言語）による出版物も望まれるところである。更にいえば、様々なプロジェクトの成果を海外の出版社から刊行することも積極的に検討されることを望みたい。

オープンデータに資する再利用可能なデータ公開への取り組みが、生成 AI 時代への学術的貢献とともに、他分野との幅広い研究連携につながるのではないかと。AI による世界の変化についての期待・不安が、アジア・アフリカの地域においてどのように認識されているのか、また、それぞれの地域社会がどのように変容しつつあるのかなどを活写し、そこから我々が学ぶべき指針を提示するような研究が展開されることを期待したい。

AA 研はこれまで多くの共同研究を行ってきた実績があり、更に、異分野間の融合を可能にするための研究者間の連携を構築することが比較的容易な環境にある。それが新たな分野の創造へと繋がるはずであり、AA 研発の新たな「人文知」の戦略的な構築を促していただきたいと思う。更に、データサイエンスをはじめとする理系の知見を加えていくことにより、人文科学系発の「総合知」あるいは文理融合的な研究の構築を目指していただきたい。

#### 観点4：共同利用の面における本研究所の活動は十分なものとなっているか。

外部評価委員会は全員一致で、共同利用の面における本研究所の活動はいずれも十分な成果を達していると判断した。

##### (1) 評価の詳細

デジタルコンテンツを集約する「オンラインリソースポータル」は、研究資源としての価値があることに加え、利用者の便宜を図っている点も評価できる。

IRC が取り組む資料のデジタル化と公開事業の中には、今となってはフィールドで直接調査することが難しくなった言語の資料やいわゆる危機言語の資料、過去の言語資料などが含まれている。また、「チベット牧畜文化ポータル・チベット牧畜文化辞典」「ツバル言語文化辞典」などの言語学関係のデータベースや、カイロにあるスルターン＝カラーウーンの寄進施設のVRプロジェクト、「カイロのイスラーム建築データベース」、「チベット高原万華鏡」など、世界的にみても極めて特色のある取り組みもなされている。

フィールドサイエンス研究企画センター（FSC）について、フィールドワークはそれぞれの学問分野による違い、地域や対象による違いなど、研究者同士で共有すべき事柄が多く、同センターがそういった場を提供している点でその果たす役割はとても大きいものがあった。

言語研修、中東・イスラーム関連セミナー、文化／社会人類学セミナー、フィールド言語学ワークショップは、次世代研究者養成のためのプログラムとして定着し、全国から広く参加者を得ているもので、研究所の特色ある活動と考えられる。

また、ウェブサイト上の「AA研を活用しよう！」は、わかりやすい構成により、共同利用促進のための優れた広報の事例になっている。

##### (2) 提言

海外学術調査フォーラムは、さまざまな分野の研究者が集う場として大きな意味を持っていたが、そこで培われた研究者ネットワークをこれからの活動にうまく活用していただきたい。

構築されたコンテンツの恒常的維持・管理をどのように担保するかが課題としてある。またデータベース等を利用した際の被引用数が追えるとよいのではないか。具体的にはDOI付与で対応できる部分があるのではないか。

AA研が蓄積してきたデジタル研究資源を活かせるよう、デジタル情報発信の整備が望まれる。

これまで研究者が蒐集してきた様々な調査資料やデータなどが散逸してしまわないよう、その個人の同意を得ることとプライバシーに配慮することを前提としつつ、可能な範囲での整理・公開をすることを願う。研究者だけを対象にするのではなく、調査対象となったコミュニティも利用できるようにすることが望ましい。研究者にとって、資料の価値そのものだけでなく、その研究者がどのような調査を行ってきたのかを知る機会となることに加え、フィールドワーク教育においても教材として利用・応用できる面も多々あると思われる。ただし、デジタル化して経年劣化を防いだとしても、フォーマットや記録媒体などが将来にわたって利用可能であり続けることは難

しいという問題がある。個々の研究機関がバラバラに取り組むよりも、人文系の研究機関が互いに協同して取り組むような体制を構築することが急務であるとする。

**観点5：本研究所と研究者コミュニティとの間で意思疎通をとるための機会は提供されているか。**

外部評価委員会は全員一致で、AA研と研究者コミュニティとの間の意思疎通はできしており、そのための運営体制が整っていると評価した。

(1) 評価の詳細

8つの外部委員会が設置され、また多様な関連学会で所員がしかるべき役職を務めており、研究者コミュニティとの間の意思疎通の機会は十分に提供されていると判断できる。

(2) 提言

一方で、外部委員会数は多すぎる印象もあり、効率的な運営を検討する余地はあるのではないかと。

今後は、社会との繋がりを緊密にするために、あるいは、研究成果の社会実装の可能性を探るために、企業関係者の意見を取り入れるような機会があってもいいのかもしれない。ひいては、それが人文系の研究成果の社会的応用のモデルにもなることが期待できるのではないかと。

国際諮問委員会がどの程度機能しているのかが資料からは読み取れなかった。外国人客員研究員からの意見聴取の他にも、協定を結んでいる海外の大学や研究機関との意見交換の場を積極的に設けてもよいのではないかと。

## 観点6：研究活動等の広報体制や研究成果の発信、共有は十分なものとなっているか。

外部評価委員会は全員一致で、AA研における研究活動等の広報体制や研究成果の発信は十分なものとなっていると評価した。ただし委員の一名からは、「現状で考えられることを行なっているという点では、そのように評価しうると考えられる」というやや消極的な評価であったことを付言しておく。

### (1) 評価の詳細

広報について、『FIELDPLUS』（フィールドプラス）が果たしていた役割は大きかったことが指摘できる。また、AA研のスタッフが蒐集した資料の展示を行なったり、書籍として各地域の絵本を出版したりするなど、その地域を一般に広く知ってもらうための取り組みが行なわれている点は高く評価される。

TUFiSCo は、東京外国語大学として AA 研と学部・大学院をつなぎながらアジア・アフリカ研究の新たな地平の開拓とそれを社会に開くためのプラットフォームとして発足し、方法論を議論するフォーラムから地元の学校との交流まで、社会に開かれた多様な活動が実施されているとみなしうる。

成果発信については、査読付き学術誌として『アジア・アフリカ言語文化研究』の高い評価が定着しているほか、オープンアクセスによる『アジア・アフリカ言語文化研究 別冊』の刊行が開始されたことも特筆に値する。

オンラインリソースポータルは、研究成果の提示であると同時に利用者に対する研究のためのツールの提供でもあり、蓄積されてきたコンテンツの豊かさは AA 研の特徴がよく反映されたものになっていると思われる。

### (2) 提言

#### [広報体制について]

休刊した『FIELDPLUS』の代替である全学サイトでの広報活動にアクセスしてもらうには一工夫が必要なところかもしれない。例えば、すでに行われているかもしれないが、SNS を活用してサイトに誘導するなどが考えられよう。また、フィールドワークに特化せず、もっと幅広いテーマを扱った一般向けの後継の刊行物があるとよいのではないか。

オンラインリソースポータルのコンテンツについて、無限に数を増やしていくのかどうかは検討課題ではないか。

X (旧 Twitter) を通じて情報の発信や宣伝活動を行われているが、他のサービス (Meta 系の SNS) でも行うこと、さらには SNS を通じた定期的な情報発信を行うことで、成果物をより周知できるのではないか。

次のステップとして、再利用可能な研究データ発信を進めるとよいのではないか。

#### [人員配置について]

多様なイベントを効果的・効率的に展開していくには社会連携に関心や経験のある若手をリクルートするなどの形でファシリテーター的な人材が配置されるとよいのではないか。所員は研究により多くの時間を割くべきであり、またより専門的な立場から全体を見渡した広報を展開するためにも URA のような立場の専従サポートスタッフの配置が望ましい。

## 観点 7：学内外の他の研究教育組織・機関との有機的な連携は図られているか。

外部評価委員会は全員一致で、AA 研と学内外の他の研究教育組織・機関との有機的な連携が十分に行われていると評価した。

### (1) 評価の詳細

大学院教育については、博士前期課程・後期課程への協力に加え、言語研修、中東☆イスラーム教育セミナー、中東☆イスラーム研究セミナーにより、研修・セミナー参加者への単位認定が可能になっている点で評価できる。

地域研究コンソーシアム (JCAS) については、設立メンバー校の 1 つであり、現在も北大スラブ・ユーラシア研究センター、京大東南アジア地域研究研究所とともに基幹組織としてその活動の中核を支えていると理解している。さらに、このような長年の緊密な関係に基づいて 3 者間のクロスアポイントメントが実現されるなど、有機的な連携に資する効果を生んできたと言えよう。

人間文化研究機構 (NIHU) のネットワーク型基幹研究プロジェクトについて、AA 研は「グローバル地中海地域研究プロジェクト」の拠点を担い、代表的な地域研究機関と見なされていると考えられる。

AA 研に設置された各種委員会には、外部の研究機関に所属する研究者が多数参画しており、幅広く連携がとれていると言える。

### (2) 提言

時間と人的リソースの投入とその効果をみながら、不採算事業を停止するという意識をもつことも重要ではないか。

多くの聴衆を集めてきた四大学連合による附置研究所持ち回りの文化講演会が終了し、後継ともいべき四大学未来共創連合 (東外大、東京科学大、一橋大、お茶の水大) の枠組みでの新たな展開に期待する。

地域研究コンソーシアムにおける、AA 研のいっそう積極的な関与を期待する。NIHU「グローバル地中海地域研究プロジェクト」の拠点としての AA 研のウェブサイトで具体的な情報が少ないことは少々残念であった。

設置法人である東京外国語大学の諸々の組織、研究者、プロジェクトとのさらなる協業を期待する。

研究面では、2022 年度に発足した全学組織 TUFs フィールドサイエンスコモンズ (TUFiSCo) において、学内の諸部局との連携のもとに、新しいフィールドワークの手法の開発、フィールドワークデータの活用と公開が行なわれることになっており、その成果が期待される。

フィールドサイエンス学際領域が、それまで続いていた海外学術調査フォーラムの後継として組織された。大学や専門分野の違いを超えて、新たに融合的なフィールドサイエンスを構築することを期待したい。

クロスアポイントメント制度による人材の交流は、国内 2 機関との間で行なわれているが、海外を含む他機関との間においても推進されることを期待したい。

**観点 8：今後の研究活動の展開に関して、どのような新基軸が必要か。また組織改編の必要があるとすればどのような部分に関わるものか。**

この観点については、外部評価委員個々の提言をそのまま記載して外部評価委員会報告とする。

- ① 日本の大学の構造的問題として、組織再編や競争的スキームという外的な圧力に対応するために、組織のなかで能力のある研究者が申請書類の作成などに多大な時間を費やしているという現状があると考えている。AA 研は研究者の数がそれほど多くない組織にもかかわらず、既にたくさんの取り組みがなされているので、能力のある研究者が書類作成に忙殺されることなく、きちんと自分の研究に取り組めているかと懸念している。

近年は、データベース作成の重要性が大きくなっていると考えている。たとえば、生物学では、システム生物学、生物情報学などの分野が興隆し、自分ではデータを生み出すことなく、データベースの二次的解析で大きな成果をあげるものも多く存在する。AA 研には人文社会科学の有用なデータベースを構築してきた実績があるので、それを、J-Peaks などの枠組みを活用しつつさらに進展させ、世界の一流研究者が常にアクセスするようなデータベースを管理することを目指すのも一案であると考えている。

- ② 今後の研究活動の展開については、やはりフラッグシップ的な大規模研究プロジェクトを掲げて共同利用・共同研究拠点である研究所としての存在感を示していただければと思う。これまで蓄積されたオンラインリソースの存在や「イスラーム信頼学」プロジェクトで培われたイスラーム・デジタル人文学の知見などを活かして、さらに最新の情報学的知見を取り込んだデジタル人文学という方向性で学際性をアピールすることは AA 研の強みを生かした選択肢の 1 つであるように感じた。アジア・アフリカを横断的に捉えることのできるアクチュアルで魅力的なテーマ設定がされることを期待したい。

専任 30~40 人規模の研究所でこれだけ数多くの多様な活動が展開されていると、所員が常に大車輪で奮闘しているとの印象を受けるが、少しでも研究に使える時間が増えるよう、業務のさらなる効率化をはかるとともに、限られた予算の中では難しいかもしれないが、広報、社会連携、多言語対応などを担う恒常的なサポートスタッフを組織に組み込んでいくことを検討されることが望ましい。

なお、研究所内のセンター等の廃止や新設の経緯から、AA 研の現在の組織構成がわかりにくくなっているように感じる。現行のわかりやすい組織図が HP 上のわかりやすい場所にあるとよい。(AA 研ウェブサイトの TUFs フィールドサイエンスコモンズ (TUFiSCo) のページ <https://www.aa.tufs.ac.jp/about/tufisco/> にある図がたいへんわかりやすいが、プロジェクト研究部フィールドサイエンス基礎研究部門と IRC が並列的な関係にあることは、「組織」のタブなど HP の他の部分の記述からはわからなかった。)

- ③ 各観点での質疑応答でも、直接、間接にコメントさせて頂いたとおり、近年のテク

ノロジー（生成系 AI）を研究活動においてどう駆使するかについての具体的な手法やスキルを習得・実践するため取り組み、人文科学系の研究分野だけでなく、理工学系の研究分野との協業や連携を具体化するための取り組みがなされることに大いに期待している。

- ④ これまで長く蓄積してきたデジタル研究資源を活用しつつ、再利用可能な研究データとしても公開していくような流れを今後発展させていっていただくと、AA研のみならず世界の研究者にとって有益なことが色々出てきて、結果としてその中心にAA研がいる、というような流れが出来ていくのではないかと期待する。アジア・アフリカ研究のためにこれほどデジタルに力を入れてきた組織は国際的にも数少ないと思うので、ぜひその方向でも頑張ってもらいたいと思う。具体的には、IRC等の既存のいずれかの組織においてデジタル部門を強化するか、あるいは、内部の各組織におけるデジタル機能を集約したような組織を作ってAA研内のより幅広い連携をはかるか、といったことになろうかと思う。また、そういう方向で海外研究機関と連携するといったこともあり得るかと思う。

やや組織防衛的な話になるが、先日の Web サイトが外部から攻撃された件について、似たような状況の先行事例が参考になる。将来的なセキュリティ対応だけでなく、継続的な運用のための業務量という観点でのコストも見込んだ上で、セキュリティ対応やシステムアップデートへの対応などの観点から継承可能でないと判断されたものはデータだけを取り出して研究データとして静的に公開するような対応が今後は必要かもしれない。そのような観点から一定の基準を設けて継承できないものは動的な公開は取りやめるといった対応がそろそろ必要な時期かと思う。折しも「再利用可能な研究データの公開」という近年のトレンドは、むしろ静的なデータ公開を喜んで受け入れるという流れでもあるので、そういう方向もご検討いただくとよいかもしいない。

- ⑤ 国内外で高く評価されている研究者集団を擁する AA 研は、社会や時代の流れに即応しながら、人文科学における新たな方法論の追究を目指してきた。その存在と成果は、これからも学术界のみならず、一般社会にとっても大きな影響力をもつものであり、人文科学の存在意義を高めることにも貢献すると考える。特にこれからの共生社会の構築にあたっては、人文科学の知見が必要不可欠であることは言うまでもない。その意味において、文化が多様化し、流動化するアジア・アフリカを直接の現場に置き、人文科学の様々な領域の共同研究を推進することによって得られる知見は、今後の日本の社会を考える上で重要な鍵となり得るといえる。

AA 研には、これまで多くの共同研究を実施してきた実績がある。人文科学のそれぞれの分野を発展・深化させるような研究は、これからも必要であり続けると考えるが、一方で、分野融合的な研究は、新たな知見を生み出す原動力となる。その発想は、柔軟な組織であってこそ可能であると思うが、AA 研の研究環境はそういった可能性を多く蔵している。その可能性を拡げていくためにも、AA 研内部のみならず、例えば、一橋大学、東京科学大学との三大学連合の枠組を活用し、新たな分野を積極的に開拓していただきたいと思う。特にデータサイエンスをはじめとする理系分野との連携は、これからの人文科学のあり方を考える上で重要になってくるので、AA 研がそのモデルの構築を主導していくことを願っている。更に

いえば、そうした分野融合的な研究成果、あるいは、人文系の研究成果がどのような形で社会に還元されうるかも考える必要があるかと思う。ひいては、それが人文系の存在意義を社会的にアピールすることにも繋がる。AA 研が人文系研究機関の拠点の一つとして、これからもそのような役割を果たしていくことを願っている。

AA 研で行なわれてきた共同研究は、アジア・アフリカのほぼ全地域を網羅するように展開されてきた。個別地域の研究は、それぞれが抱える課題の解決のために必要ではあるが、そもそもなぜ「アジア・アフリカ」なのかを問うためにも、これからは「超域」的な研究も重点的に推進していただきたいと思う。その成果は、新たな人文知の創造に繋がることが大いに期待される。特に全所プロジェクト「トランスカルチャー状況下における分極と共生の解明：アジア・アフリカの人々とともにつくる人文知の『共有』と『対話』のプラットフォーム構築」は、多様化し、人々の流動性が増している今の社会を具に捉えようとするものであり、そこで展開されている基幹研究間の協同・連関によって、新たな人文知、更にそれを基盤とした総合知を構築することが大いに期待される。

事業全般を見直し、効果のない事業（があるのかどうかは分かりませんが）はやめるなどの思い切った改革が必要ではないか考える。事業を削減するのが難しければ、人員増によって、個人の負担を減らすしかないと思うが、AA 研も人事は人件費ポイントで決められていることと思うので、限られたポイントの範囲で自由な人事を行なうことは難しいと思う。現有数以上の教員数を確保するための新規採用、また、事務職員の配置を検討するには、全学的な人事計画の見直しが必要になってくると思われるので、簡単なことではないと思うが、適正な数の教員の確保と事務職員の配置は、次の中期目標・中期計画の策定にあたって検討すべき事項と考える。

それから、今回、外部評価の業務を行なうに際し、各種資料を拝見したが、年度ごとの資料となっているために、全体像がどのようなになっているのか、あるいは、年度を跨いでどのような変化があったのかが分かりにくいと感じた。いくつかの項目については図表などによって経年変化が分かるような工夫があるとよかったと思う。

以上